

モラルサイエンス研究会（令和元年6月5日）発表要旨

「知徳一体」概念の現代的文脈への応用  
—AIの開発と利用等の関連において—

社会科学研究室  
教授 梅田 徹

廣池千九郎は、自身が提唱した「最高道徳」の特徴の一つを「知徳一体」に求めた。報告者は、オリジナルな「知徳一体」を基礎に知性と徳性の一致（または合致的発展）という形に再構成し、現代的な文脈に応用することを試みた。素材としては近年急速に発展したAI（人工知能）を取り上げ、「知徳一体」立場から何が言えるのかを議論した。ウォラック&アレン『ロボットに倫理を教える：モラル・マシーン』は、技術者らがロボットに徳性を組み込むことを提唱している。ある意味、これは、ロボットの中に「知徳一体」が実現されるかのようにも映る。しかし、実際には人間と同じ完璧なロボットは実現できない。著者らもこの点を認めている。それは、ロボットのアウトプット（または評価・行為）について一定の判断・評価を下せるのは人間しかないことを意味する。AIの発展は皮肉にも人間の意義を再評価する契機であるのかもしれない。むしろ、人間であることのなかに「知徳一体」の核心を求めるべきなのではないか。AIと人間の関係性の中に鍵が隠されているように思われる。